

博士学位論文

内容の要旨及び審査結果の要旨

平成 28 年度

京都造形芸術大学大学院

芸術研究科

課程博士

| 学位記番号 | 学位の種類 | 氏名 | 論文題目 |
|----------|--------|--------|------------------------------------|
| 甲 第 54 号 | 博士(芸術) | 鄭 智恩 | 亜鉛結晶釉の結晶析出の多様化に関する研究 |
| 甲 第 55 号 | 博士(芸術) | 小野塚 佳代 | 戦時下の諷刺漫画におけるユーモア —近藤日出造と雑誌『漫画』— |

| | |
|---------|---|
| 氏名 | 鄭智恩 |
| 学位の種類 | 博士（芸術） |
| 学位記番号 | 甲 第 54 号 |
| 学位授与の日付 | 平成 29 年 3 月 18 日 |
| 学位授与の要件 | 学則第 36 条第 1 項該当（課程博士） |
| 学位論文題目 | 亜鉛結晶釉の結晶析出の多様化に関する研究 |
| 審査委員 | 主査：岡田 文男（本学歴史遺産学科教授） 副査：中ノ堂 一信（本学大学院芸術研究科客員教授） 副査：清水 六兵衛（本学美術工芸学科教授） 副査：田口 肇（京都市産業技術研究所窯業系チーム研究主幹） |

内容の要旨

本論文では、釉薬の持つ芸術性に着目した。釉薬は陶芸の装飾方法の中で、芸術性を向上させる最も良い手段である。釉薬は、過去から現在まで数多くの研究と実験を通じて発展してきた。数多くの釉薬の中で結晶釉薬は流動性が強く、焼成方法の調整が難しいなど、非常に扱いにくいものの一つである。しかし、釉薬で表現できる芸術的価値が高いため、現在も開発が進められている。筆者は本論文の研究を通し、亜鉛結晶釉薬の活用性を高め、結晶の多様な芸術的表現の可能性を提示することを目標とした。

第一部では、亜鉛結晶釉薬に発色酸化物を添加する実験を行った。発色剤の添加により、結晶の発色が変化することを観察した。加えて発色剤の添加と共に、結晶が成長する温度による結晶形の変化を観察した。結晶を成長させるために設定した温度は 1150℃、1100℃、1050℃である。各成長温度で 5 時間維持した結果、1150℃では針状結晶、1100℃では扇状結晶、1050℃ではカスミソウ、雲形結晶にそれぞれ析出した。

各発色剤の添加量に応じ、結晶部分と背景部分の発色が変化した。発色剤としての酸化マンガン、酸化鉄、酸化銅の発色効果は結晶と背景部分の両方に影響を及ぼした。すなわち、発色剤の添加量が 5 % 以下の場合、結晶は大きく成長した。同じく 5 % 以上の場合、結晶の周囲に枠が成長した。

酸化ニッケルは結晶発色と背景発色が異なるという結果が導出された。発色剤の添加量が増えるにつれ、釉薬自体が結晶化され、亜鉛結晶と見られる結晶は析出しなかった。発色剤を複数添加する実験では、発色剤の基本的な発色効果が互いに影響を与えることが発見できた。発色剤の添加量がそれぞれ 1 ~ 2 % の場合、それぞれの結晶の発色が混合した結果となった。3 % 以上添加した場合、単独添加 5 % 以上で観察することのできた特殊な結晶の形（結晶の筋、枠など）が析出されるなど、予測可能な範囲を超えた結晶の析出が観察できた。3 種類の発色剤を添加した結果、添加量が多くなると、結晶の中で添加された発色剤が相互に影響を与え、様々な色に発色した。

発色剤による結晶発色の実験結果をもとに、結晶が成長する温度による結晶模様の析出パターンを利用し、結晶の成長温度を変化させる研究を行った。温度の変化は大きく 1150℃

から 1100℃、1050℃に温度を下降させる方法、1100℃、1050℃から 1150℃に温度を上昇させる方法で実験を行った。その結果、1150℃から針状結晶が生成し、結晶が成長した先端から 1100℃、1050℃の扇形結晶、雲形結晶が成長した。1100℃、1050℃から 1150℃に温度を上昇させると、扇形結晶と雲形結晶の先端から針状結晶が析出した。結晶成長温度の維持時間により、結晶成長の大きさが変化し、各温度に応じた成長形態が忠実に再現されることが分かった。この現象を利用すると結晶が析出される形態や模様をより一層多様化することができるかと考察する。

第二部では亜鉛結晶釉薬を実際の器形に試釉し焼成した。テストピースのような平面に限らず、器のような立体でも結晶が析出することを観察しようとした。制作した実用例（作品）は第一部で得られたテストピースの結果をもとに、発色剤の添加や焼成方法の実験データを総合的に用いて制作を行った。

その結果、制作した器物の形に添って釉薬が流れる過程で結晶が析出された。釉薬の流動性が強いと、器の内側に釉薬が溜まり、結晶核密集によるマット化が進んだ部分もある。発色剤による発色効果や結晶成長温度による結晶の析出は、作品全般で充実に再現されている。結晶釉薬のテストピースと比較すると、釉薬の流れによりガラス質の厚さに変化が生じることから結晶の析出にも変化があった。

亜鉛結晶釉と他の釉薬と混合使用した作品は、結晶釉薬が流れる現象により、発色の変化があった。釉薬が重なって試釉された部分はお互いに発色の影響があり、結晶は析出なかった。各釉薬の流動性の相違な特徴を生かし、焼成の際に混ざり合うように施釉したことで、自然な発色のコントラストやグラデーションを生み出すことができた。

亜鉛結晶釉薬を実際の作品などに用いると、結晶が析出するまでに多くの変数が作用する。すなわち、釉薬の流動性、焼成方法、釉薬の厚さ、作品の形、冷却方法などにより、結晶が析出するまでに多くの過程に関わることが明らかとなった。テストピースでは安定した結晶が析出しても、実際の使用過程で様々な変数により失敗することが多い。だが、このような問題点を制作方法として利用すると、一つの釉薬からは表現できない様々な表情の作品を生み出すことができる。

本研究を通し、亜鉛結晶が生成され成長する過程での発色や結晶形の多様化の例をテストピースとして提示した。そして、テストピースの結果をもとに、作品の制作を行った。陶芸産業において、本研究が亜鉛結晶釉薬の多様な可能性を高め、芸術的な表現形式として、活用できることを期待する。

Summary in English

A Study on the diversification of the crystallization of zinc crystal glaze

This paper takes notice of artistic expression as well as functional element of

glaze. To pursue artistic expression method, various methods to depose crystal of "zinc crystal glaze" is studied.

In this study, combination with one zinc crystal glaze, producing color with added color developer, and change of crystal deposit pattern with burning conditions and cooling methods, are experimented through the test pieces. In addition, based on the result of the experiment, zinc crystal glaze is glazed to actual ceramics, and observed whether expressions by the crystal resulted in not only test pieces but also actual products.

In part one, the experiment for fundamental preparation of zin crystal glaze setting is conducted. Based on the result of the experiment, the color producing reagent is conducted. Added color producing regents are MnO, Fe₂O₃, CuO and NiO₂. I observed how crystal form changed by the difference in the preset temperature.

As a result, both the crystal and the background color were changed by the addition amount of the color producing reagents. When the addition amount of the color producing reagent was less than 5 %, a crystal grew big, and more than 5 %, a frame was observed by a crystal. Fe₂O₃ developed color from yellow to dark brown overall, and producing color of iron oxide also effect for producing color of crystal and background. CuO producing color from light blue-green to green near black with increased amount of addition, and copper oxide influence both producing color of crystal and background, with NiO, produced color in blue for crystal part and in yellow for background part. When increased amount of addition, all the surface of glaze crystallized without depositing zinc crystal.

In the study of comparison analysis for crystal pattern change by crystal growth temperature, it was found that crystal showed characteristic growth in each crystal growth temperature. Capillary crystal in crystal growth at 1150 °C, fan-shaped crystal at 1100 °C, and baby's breath-shaped crystal at 1050 °C, are deposited. Based on these results, in part 2, I experimented on the change of crystal growth temperature, and observed pattern change in crystal glowing process. I also experimented with the burning method of keeping time, after keeping 1150 °C for 3 hours, cooled down temperature to 1100 °C and 1050 °C, and after keeping 1150 °C for 3 hours, and heat up temperature to 1150 °C and keeping it for 3 hours. With the test of keeping 1150 °C for 3 hours and keeping 1100 °C and 1050 °C for 3 hours, top of the capillary crystal at 1150 °C, and fan-shaped crystal at 1100 °C, and baby's breath-shaped crystal at 1050 °C, are deposited.

The test peace of keeping 3 hours at 1150 °C, and 3 hours at 1100 °C and 1150 °C, fan-shaped crystal at 1100 °C from crystal core, baby's breath-shaped

crystal at 1050 °C, capillary crystal from the top at 1150 °C, are deposited. With adjusting crystal growth temperature, various crystal patterns can be induced. I conclude it to be a very good method to expand the width of the artistic expression of the glaze.

審査結果概要

当該学位申請論文は陶芸分野における亜鉛結晶釉の多様性に着目し、発色剤の組み合わせならびに結晶析出温度に昇温・降温操作を加えることにより、あらたな結晶生成を目指すとともにそれを作品制作に応用した研究である。論文は 2 部構成からなり、第 1 部において試験片を用いた結晶析出実験とその結果を、第 2 部では試験片の結果をもとに制作した作品を報告したものである。第 1 部では昨年 7 月の予備審査段階において未成であった実験を補完し、加筆訂正したものとなっている。昨年 7 月には亜鉛結晶を発色させる金属酸化物として、酸化マンガン (MnO_2)、酸化コバルト (Co_3O_4)、酸化ニッケル (NiO)、酸化銅 (CuO)、酸化鉄 (Fe_2O_3) を選定し、それらの組み合わせによる結晶の析出を試行する段階にあり、作品制作においても内容、点数とも不十分であった。それに対して当該論文においては当初予定した実験結果がすべて提示され、論文の完成度に明らかな進展が認められた。実験内容においても、発色剤の複合使用、結晶析出温度における昇温、降温操作を取り入れたことによって新たな形態の結晶を生成させるなど、結果に新知見が認められた。なお、論文提出までの時間が不足したためか、本文中の図版番号と写真図版番号の一部が整合していない点や、焼成温度のグラフに記述間違いがあるなど、細かなミスが散見された。しかしながら、それらは論文内容の根幹に関わるものではなく、訂正可能なミスであった。他方、第 2 部において提示された審査作品は、第 1 部で行った実験結果をもとに制作されたものであるが、既往の作品を超えるものとは言い難かった。

試験結果概要

公開口頭試問は論文審査、作品審査とも各 50 分間行われた。論文審査において申請者によるパワーポイントを用いた第 1 部の基礎実験に関する発表が 20 分間行われ、その後、3 名の副査より合計 30 分間の質疑応答が行われた。質問内容は最初に陶芸史の観点から、東アジアにおける釉薬の歴史と直接関係ない亜鉛結晶釉を研究対象とした申請者の理由説明が求められた。次いで釉薬について、亜鉛結晶釉析出メカニズムの理解、釉薬調合における粒径と結晶核成長についての理解、胎土の選定根拠、焼成温度と結晶析出温度管理の理解を中心に質疑が行われ、申請者はそれらに誠実に応答した。特に、窯業化学分野を専門とする副査による質問ならびに助言は、申請者自身の亜鉛結晶析出メカニズムの理解を確実に深化させることにつながり、口頭試問における大きな成果となった。続いて作品展示会場において、申請者による作品制作の背景説明が約 15 分間、続いて作品に関する質疑応答が約 30 分間、行われた。質疑応答において、論文提出後に制作された参考作品は結晶成長を一定レベルまで制御しており、魅力ある作品であると各審査員が一様に高く評価した。

審査員からの助言として、亜鉛結晶釉のかけ分け、二度焼き、三度焼きを試みることであり、釉薬の核を確実に分散させて結晶の成長を促し、偶然性を低減できるのではないかとする助言が出された。

総合所見

申請者は当該学位申請論文において、西洋で開発された亜鉛結晶釉を対象とし、既往の結晶析出方法に新たな工夫を加え、それを作品制作に応用する研究を行った。その研究において結晶析出のための試験片には磁土を用い、その上に亜鉛結晶を核として析出させ、そこに発色剤である酸化マンガン (MnO_2)、酸化コバルト (Co_3O_4)、酸化ニッケル (NiO)、酸化銅 (CuO)、酸化鉄 (Fe_2O_3) をそれぞれ単独のみならず、複数の発色剤を組み合わせることにより、結晶を多様化させることを試みた。既往の研究においては発色剤を単独で用い、結晶析出温度についても焼成温度を $1100^{\circ}C$ で一定時間保持するのが常識であった。それに対して申請者は発色剤を複合的に用いることで結晶析出パターンを多様化させ、かつ結晶析出温度に昇温、降温操作を加えることで、一旦析出した結晶をさらに複雑に変化させることを試みた。そうした試験片をもとにした作品制作は、曲面を持つ器を対象としたものである。論文提出以降に制作し、参考作品として提示した直径 50 センチの大皿は、結晶が見込みの全面に均等に分散し、結晶の色調が地色とみごとに調和しており、結晶の大きさもごく自然であった。論文提出後に作品の質が飛躍的に向上したことは、申請者が作品制作に真摯に励んだ証といえ、審査員の高く評価するところとなった。さらに、口頭試問における審査員の質問や助言を前向きに受け止めた申請者の姿勢も、今後の作品制作に必ず反映するものと期待できる。

以上、当該学位申請論文は当該研究分野において、結晶析出に用いる発色剤ならびに結晶析出温度に独自の工夫を凝らしたものであり、それらに基づいて制作された作品は水準以上の質を保持している。上記により、学位申請論文は博士(芸術)の学位に相当するものと、審査員一同の評価が一致した。

| | |
|---------|---|
| 氏名 | 小野塚 佳代 |
| 学位の種類 | 博士（芸術） |
| 学位記番号 | 甲 第 55 号 |
| 学位授与の日付 | 平成 29 年 3 月 18 日 |
| 学位授与の要件 | 学則第 36 条第 1 項該当（課程博士） |
| 学位論文題目 | 戦時下の諷刺漫画におけるユーモア —近藤日出造と雑誌『漫画』— |
| 審査委員 | 主査：森山 直人（本学舞台芸術学科教授） 副査：尾池 和夫（本学芸術学部教授） 副査：田中 勝（本学文明哲学研究所准教授） 副査：牧野 圭一（漫画家、京都精華大学名誉教授） |

内容の要旨

本研究は、漫画及び、諷刺漫画を通して表現と平和、芸術と平和について深く考えてゆくことを目的としている。これは平和に相反する、戦争のために利用された漫画作品について研究することで、逆説的に平和へ活かすための漫画について考察することを目指すものである。漫画は戦中、戦意高揚と戦争政策の推進のために、有効なプロパガンダとして利用された。太平洋戦争下で描かれた諷刺漫画の一例として、諷刺漫画家、近藤日出造が編集人を務めた月刊雑誌『漫画』を取り上げる。この雑誌を対象として、戦時下における諷刺漫画の表現を分析した。

第一章では、次の三つについて論じた。まず、漫画にとって重要な風刺と滑稽の要素について。次に、表現の自由と規制を巡る漫画の課題について。そして、先行研究についてである。

漫画にとって、風刺と滑稽の要素の重要性を、チャールズ・ワーグマン、牧野圭一、石ノ森章太郎、清水勲、源豊宗による『鳥獣戯画解説』といった、漫画家、漫画研究者による論説を引用しながら述べた。そこから、筆者の考える漫画は次の三点に要約される。まず、漫画は誰にでも描ける記号性を持っている。そして、漫画は主に文字と絵の二つの言語によって成り立っている。最後に、余分も含めた「おしゃべり」な情報量がユーモアを生み、その笑いは漫画にとって不可欠なものだ、ということである。

そして、漫画の課題をイメージの翻訳と、表現の自由と規制の論点から述べた。

同じ題材を用いた異なる諷刺漫画作品を取り上げ、作品から得られる異なる内容を比較した。アメリカ合衆国のアイコンとして自由の女神像を用いた一齣漫画作品には、次の二点を取り上げた。現代の銃規制問題を描いた牧野圭一による『持つ自銃撃つ自銃もある大国じゃ』（2015年）と、真珠湾攻撃後に発行された『漫画』中の『夜な夜なルーズヴェルトの闇をおびやかす自由の女神』（1942年）である。他にも、葛飾北斎の『富岳三十六景、神奈川沖波浦』が、東北地方太平洋沖地震による津波に見立てられた海外

の諷刺漫画の例を挙げた。ここから、立場や文化を超えて読まれてゆくイメージの翻訳について論じた。そこから分かってきたことは、漫画は多様な鑑賞を可能にする創造性を持つ一方で、誤読や誤解によって起きる問題もある、ということである。

2015年のシャルリー・エブド襲撃事件は、それが表面化した国際的事件であったと言える。諷刺漫画はいつの時代も表現の自由と冒涇の狭間で揺れている。昭和天皇に対する不敬罪とされた近藤日出造の『打つ手なし あるは食ふ口 しゃべる口』といった、戦後の作品にもこれと共通する課題を見ることができた。

第一章の最後では先行研究について述べる。戦争と芸術に関する研究は近年多く発表されている。しかし、漫画に関してはまだ多くの研究がなされているとはいえない。太平洋戦争下の雑誌『漫画』の調査は、本研究が初めての試みである。また、近藤日出造研究は、近藤と生前交流のあった『漫画サンデー』編集長の峯島正行をはじめ、身内や近い同業者によって執筆された記録が残っているが、本格的な作家研究はまだ無い。

第二章では、近藤日出造と、雑誌『漫画』の1940年から1944年の内容について述べた。

近藤日出造の師である岡本一平は、夏目漱石に漫画の腕を評価されて1912年朝日新聞に入社した。その後1948年に没するまで漫画界に君臨し、「漫画漫文」という独自のスタイルを確立した。近藤日出造は、特に似顔作品においては師をも凌ぎ、代表的な作品としては読売新聞二面漫画が知られている。戦中、近藤は新日本漫画家協会機関誌として刊行された雑誌『漫画』の編集人を務め、同誌では翼賛色の強い漫画作品を発表した。

大衆向け漫画を中心に、漫画は多くの子どもたちに夢を与えていたが、日中戦争と太平洋戦争によって子ども漫画は徐々に姿を消した。こうした流れの中で、雑誌『漫画』は1940年から1951年にかけて発行された。

1940年、1941年の発行当初には、まだ漫画の自由が保たれており、その掲載作品にはユーモアが見られた。1942年2月号は開戦記念号とされ、同年4月に発行された特別号『米英南方追放号』とともによく売れた。誌面には、フランクリン・ルーズヴェルト、ウィンストン・チャーチル、蒋介石らが頻繁に登場する。1943年から1944年の戦局が厳しい時期になると、それらの人物の描かれ方に特徴が表れた。それは、敵国の人間を人として描かないというものである。この特徴を調査するために行った見立て表現調査では、『漫画』104冊3985頁中、415点が確認できた。そして、1943年と1944年には特に多くが確認された。加えてこの年の掲載作品には、より残虐性が強調されていることが分かった。

第三章では、終戦の1945年に発行された『漫画』について述べた。

1945年7月に召集令状を受けた近藤は、それ以後1946年1月号の表紙に、赤い鉄格子に捕らえられた東条英機を描くまで掲載が途絶える。この年に発行が確認できた『漫画』は5冊であり、いずれも終戦後に発行された。その内容は、翼賛色の濃い戦中の内容とは対照的に、戦後日本の復興と庶民の慰安を目的に作品が描かれた。また、米英文化に対する姿勢も大きく変化し、1946年5月号から『漫画』もタイトルが英語で

併記されるようになった。作中でも、アメリカ兵と親しくする日本人の様子が描かれている。第二章で論じた見立て表現は 1945 年に 1 点も確認されず、風刺の矛先は、敵国から自国へと移った。このような表現の変化は、読者の在り方の変化が反映されているということでもある。読者像は戦中の理想的な国民から、庶民へと変貌した。また戦後には、表現の自由の無い戦中に対する、漫画家の本音も語られた。

第四章では、これまでの調査と考察を踏まえ、現代にも通じるユーモアの必要性について論じた。

戦中は国家、戦後は GHQ による言論統制が行われた。そのような中、多くの漫画家が翼賛漫画を描き、伝単の作成等にあたり敵地へ派遣された。

漫画が本格的に規制の対象として見られ始めたのは、明治の自由民権運動期である。諷刺漫画の自由という点において、この二つの時代の大きな違いは、一方は革命の精神に満ちていたこと、他方は、笑いの求められない戦争という環境にあったことである。

漫画は、戦争と平和、どちらか一方を支持してきたわけではない。しかしその効果的な伝達力は、これまで双方に利用されてきた。よって、漫画、あるいは表現をどう活用するか、社会の価値が問われる。しかし、時代や環境によって変化するリテラシーに注目すると、社会の移ろいやすさが分かる。均一ではない社会のユーモアに対する反応と、変質する笑いの危険性を理解した上で、それでも漫画の笑い、ユーモアは守られなければならない。これを、1859 年にジョン・スチュアート・ミルが『自由論』の中で訴えた、言論の自由を保障する社会的意義の視点から論じた。つまり、風刺はより良い人間の発展と、表現の自由は人類の福祉のためにという前提のもとで成り立っている。規制に縛られない「おしゃべり」な漫画表現が盛んな文化とは、笑いを育む文化を指し、これは表現の自由が保障される環境である。そしてまた、平和を育む土壌となる。これらについて、筆者が 2014 年に小学生を対象に行ったワークショップを事例に挙げながら論じた。

結論では、本論により明らかになった点と、今後の課題について述べた。

本論における雑誌『漫画』の調査から分かったことは、次のようなことである。まず、戦時下の『漫画』では、敵を笑いの対象にする。その笑いは特に嘲弄の性格が強い笑いである。また、戦局が激しくなるにつれて嘲弄は殺意へと変化し、これは敵を人間として描かない見立て表現に現れた。

以上の調査から逆説的に分かったことは、漫画には笑いが不可欠であり、それによって形成されるユーモアの文化は、平和の土壌となる、ということである。だが、漫画の表現、笑いには、楽しく朗らかな笑いから、人間の破滅を求める笑いまで様々な側面がある。この認識を持ちながら、有効に表現を活用できる社会と、リテラシーの創造が重要である。

また、調査から、戦中の『漫画』が大変希少な資料であることが分かった。1940 年

～1945年の『漫画』が確認できた調査資料館は、京都国際マンガミュージアムと長野県の千曲市ふる里漫画館のみである。

今後の課題は、次の三点である。まず、戦後に発行された雑誌『漫画』内容の、より深い考察。そして、今後は漫画作品への考察に、新聞などの事実記録と照らし合わせる作業をより丁寧に加えてゆくこと。最後に、近藤日出造研究として、『漫画』以外に同作家が成した広範な仕事について調査を進め、その諷刺漫画家としての内実により迫る研究を行う。以上を今後の課題、研究の方向性とし、漫画を通じて、漫画と戦争、あるいは漫画と平和についてより深く追求してゆく。

Summary in English

On the Humor of the Satire Cartoon in Times of War: Kondo Hidezo and the Magazine “Manga”

This thesis aims for consideration about cartoon for peace, paradoxically by researching cartoons used for war. I pick up the monthly magazine “MANGA”, for which satire cartoonist Kondo Hidezo served as an editor, as an example of satire cartoon drawn under the pacific war. I analyzed expression of satire cartoons from “MANGA” under war.

In chapter 1, I discussed the next three issues: first, about satire and humor, the two important elements in cartoon; secondary, about problems of cartoon over the freedom of expression and regulation; third, about prior research.

I stated the importance of satire and humor for cartoon, by quoting editorials of cartoonists and cartoon scholars, Charles Wirgman, Makino Keiichi, Ishinomori Shotaro and “Commentary of Chouju-Giga” by Minamoto Toyomune. I summarized cartoon according to the following three points. First, cartoon has symbol characteristic. Next, cartoon consists of mainly two languages, letters and images. At last, “talkative” information gives humor, and laughter is necessary to cartoon.

I picked up different satire cartoons using same motif, and compared the content. For example, “Power with own gun to have, own gun to shoot” (2015) about gun control issue by Makino Keiichi, and “Night after Night, the Statue of Liberty Threatening the Darkness of Roosevelt” (1942) from “MANGA” published after the attack on Pearl Harbor. I discussed about the translation of image, read over one’s position or culture. Cartoon has creativity to make audience able to appreciate in various ways, although there are problems caused from misread and misunderstanding. In any era, satire cartoon is swaying between freedom of expression and blasphemy.

I stated prior research. There are many researchs about war and art in recent years. However, still

there are not many in cartoon. This research about the magazine “MANGA” is the very first attempt. Artist research of Kondo Hidezo has not been conducted yet. Records concerning Kondo have been written by Mineshima Masayuki.

In chapter 2, I stated Kondo Hidezo, and 1940 to 1944 content of the magazine “MANGA”.

Natsume Soseki highly evaluated Okamoto Ippei, a master of Kondo, in his cartoon skill. He established “MANGA MANBUN” style. Kondo surpassed the master especially in cartoon portrait skill, and his representative work is presented as the second page cartoon in Yomiuri newspaper. “MANGA” was published as an organ bulletin of the New Japan Cartoonist Association, and the editor Kondo presented cartoons assisting imperial rule in wartime.

Middlebrow cartoon was giving dreams to the children, although they disappeared due to the Sino – Japanese War and the Pacific War.

In 1940 and 1941, still there was a freedom of expression in cartoon. February 1942 issue, named as Open War Memorial issue, was sold very well with April 1942 special issue “US and UK Expulsion issue”. In the magazine, Franklin Roosevelt, Winston Churchill, Chiang Chung-Cheng appeared often. As the war became desperate, characteristic has appeared in cartoon as a way not draw enemy as man. I have found 415 resemble expression from 104 “MANGA” magazine issues, out of 3985 pages. I confirmed especially many of them in 1943 and 1944. Additionally in these years, savagery was more emphasized in cartoon.

In chapter 3, I stated “MANGA” in 1945, the year of the war end.

Kondo received a draft paper in July 1945. His cartoon stopped being published until when he drew Tojo Hideki on the cover of January 1946 issue. There are five “MANGA” issues confirmed in 1945, all of which were published after the end of war. The content showed an opposite content of the wartime. In 1945, cartoon expressed reconstruction of Japan and comfort for people. Also, a posture for US and UK culture has changed. The Japanese being friendly to American army are drawn in cartoons. Resemble expression as I discussed in chapter 2 could not be confirmed in 1945, and spear of satire has changed to their own country from their enemy. This change of expression also means that it is a reflection of the change among readers. An image of readers has changed from that of the ideal empire people in wartime to common people. Also, real intention of cartoonists was also told after the war, about cartoons under war with no freedom of expression.

In chapter 4, I discussed necessity of humor which can be regarded as a common thing to the present.

The freedom of Control speech was restricted by the nation under war, also by GHQ after the war. Many cartoonists drew cartoons assisting imperial rule, and they had been dispatched to enemy territory for creating propaganda leaflet.

Cartoon did actually support neither war nor peace though effective transmissible power of cartoon had been used for both. Therefore, the value of society should be demanded when we think of how to use cartoon.

I discussed the issue from the point of view of social meaning to guarantee the freedom of speech, from what John Stuart Mill has appealed in *On Liberty* (1859). Satire cartoon consists of development for human, and the freedom of expression consists of human welfare as a premise. Culture with “talkative” cartoon expression indicates a culture with laughter, and this environment guarantees the freedom of expression. I also gave an example of the workshop that I conducted in 2014 with students in an elementary school art class.

As a conclusion, the following are the problems that are revealed from the research. “MANGA” under war makes the target of laughter against enemy. This laughter had a character of ridicule. Ridicule turned into murderous intent, and it appeared in cartoon as resemble expression, not drawing enemy as human.

Laughter is necessary for cartoon, and culture of humor becomes a soil of peace.

Also I found that “MANGA” published under wartime are very rare materials.

Future issues are as follows: first, to deeply examine of the after war issues of the “MANGA;” then, to add checking work carefully, with cartoon recording facts such as in newspaper; and last, to research more about broad range of works by Kondo Hidezo in order to approach his satire cartoonist history.

I will continue to pursue deeply the relationship between cartoon and war, and one between cartoon and peace.

審査結果概要

本論文は、漫画を研究対象とし、特に諷刺漫画を通して芸術表現と平和の問題について考察しようとしている。学位申請者は、第二次世界大戦期から戦後にかけて活動した漫画作家・近藤日出造と、彼が中心となって編集に関わった雑誌『漫画』を主な調査対象とし、戦時下における笑いの変遷（＝変質のプロセス）を、特に「見立て表現」等に焦点をあてながら実証的に検討している。テーマ及び方法の設定は的確であり、すべての章に関して、考察も概ね適切であるが、収集した資料及び先行研究等の内容を十分に分析し切れていない点も少なからず見られ、議論の幅や深まりという点での物足りなさも否めない。とはいえ、扱っているテーマ自体が「漫画」、さらには「芸術と平和」という問題系においてきわめて本質的なものであるため、簡単に結論を導き出せる性質のものではない。その意味では、申請者自身が漫画作家という立場から、果敢に大きなテーマに取り組み、丁寧な事例分析を通じて、今後のさまざまな研究に道を開き得る考察を行った点は、高く評価されるべきであり、本学大学院の「研究・制作」系の研究にふさわしい内容となっている。

提出された参考作品は、「諷刺漫画」としてのインパクトという点では弱さも拭えないが、

申請者に特有の描線のタッチの美しさや対象を捉える「眼差し」には、確かな作家としての個性がうかがえるものであり、研究論文との関連性も十分に認められる。

試験結果概要

プレゼンテーションは、概ね、論文発表、作品発表とも、提出された論文・作品に沿って、持ち時間を有効に使いながら丁寧な説明がなされた。論文中で、やや曖昧なまま使用されていたいくつかの概念や、分析が必ずしも十分でなかった箇所に関する質疑応答については、必ずしも明確にし切れなかった部分も残ったものの、全体としては大きな瑕疵はなく、誠実に応答がなされたといえる。

総合所見

本論文は、漫画研究のみならず、「戦争と芸術」という普遍性の高いテーマに積極的に取り組んだ意欲的な研究であり、芸術研究、芸術平和学的な観点からも刺激的な内容に仕上がっている。ここでなされている考察のなかには、新聞や雑誌等に調査対象を広げたり、市民の側からの受容に関する意識調査等を加えたりすることで、さらに議論が深まっていくことが予想されるという点で、いまだ萌芽的なものにとどまっている点も少なからずあるが、漫画作家が漫画の本質に果敢に切り込んでいった例はこれまで全くといいほどない。雑誌『漫画』や近藤日出造に関する本格的な探究に先鞭をつけたこととあわせて、そのパイオニア的価値は高く評価すべきである。

近代国民国家における「公衆」を「読者」として誕生した近代以降の「諷刺漫画」は、その表現のうちに〈パブリックなもの〉を必然的に有しているが、申請者が「漫画」において最も重要なものと位置づけている「ユーモア」への分析は、近代以降の漫画の本質的な存立構造に対する本質的な問いを内包している。この点に、ともすれば作品至上主義に陥りがちな風潮に対する申請者独自の貴重な批評精神がみとめられ、それは現場主義から距離をおいた大学という場において、はじめて実現可能であったといえることができる。

以上の諸点からみて、本研究は、本学博士学位授与に十分値する内容と判断する。なお、本文の一部に明らかな事実誤認の箇所や誤字・脱字が見られるほか、目次や註・参考文献リスト、英文要旨等にも不備があり、これらは正本提出時までに修正を要する。また「終章」は「第四章」に訂正することが望ましい。